

万葉学者、墓をしまい母を送る

奈良大学文学部 教授 上野 誠氏

火曜午餐会・2月第1例会を、2日、当部5階大会議室で開催した。

講師に奈良大学文学部教授 上野 誠氏を招き、日本エッセイスト・クラブ賞を受賞された著書「万葉学者、墓をしまい母を送る」を著された思いについて語って頂いた。講演要旨は次の通り。

仏教にも、キリスト教にも、当初にはさまざまな宗教対立があったが、結局は日本社会に土着していった。仏教も、キリスト教も、それぞれの時代の要請のなかで揺らぎながら、日本社会の宗教になっていった、と思う。

もちろん、今日でも深刻な宗教対立があることは知っているが、概ね、日本人はそれぞれの宗教、宗教というより宗教文化を、自己への生活のなかに取り込んでいったのではないか、と思う。東アジアや西欧においては対立軸にあるものも、日本においては奇妙に調和してしまうのである（上野誠『万葉集から古代を読みとく』筑摩書房、2017年）。つまり、「重層」しながら残り、生活のなかでゆっくりと「内包」されてゆくのだ。そういう見方は、楽観的過ぎるだろうか。

教会で七五三の祝いを考えた母

以上のような宗教のありようを、「習合」といったり、「シンクレティズム」と言ったりするが、日本型の「習合」の特徴は、歴史的に受け入れたものが、住み分けしながら、社会に土着してゆく点にある、と思う。例えば、大日如来は天照大御神の化身である。いや違う、逆だ、大日如来が天照大御神の化身なのだといった具合に、神仏が裏表の関係になってしまうのである。さらには、日本の神々が、仏法を守る神々、すなわ

ち護法神として位置づけられることもある。宗教、宗派というものは霊的なものの説明の体系なので、さまざまな説明が可能なのである。ところが、この説明方法を巡って、歴史的には対立したり、戦争になったりもするのである。日本社会は、この説明を融通無碍に行なって、巧みに宗教、宗派間の対立を回避してきた歴史がある。日本社会においては、いわば「何でも教」になってしまうのである。

わが家の無節操「何でも教」が、地域社会に果たした役割を、ここで一つ紹介しておこう。たぶん、母が教会の「お役」をしている時であったと思うが、母の提案で、教会でも「七五三」をしようということになった。そこで、十一月の土曜、日曜に「七五三」の礼拝を行なうようになった。母は、神社にお参りに行った帰りに、教会にもお参りに来てもらえばよいくらいの考えで提案したのであろう。そのために、知り合いの飴屋さんに頼んで、教会で配

布する千歳飴を作ってもらおうとしたのである。ところがだ。袋のデザインに、はたと行き詰まってしまったのだ。袋を作る業者は、教会の千歳飴の袋なんて誰もデザインしたことがないという。そこで、飴屋さんに出入りの袋の業者さんと話し合い、マリア像となぜか朝陽をあしらった千歳飴の袋を作ってもらうことにした。

当初、母たちは、神社から教会に回って来てくれるかと不安であったらしいが、教会でも七五三をやっていることがわかると、多くの子供とその親たちが晴れ着でやって来てくれた。それも、そのはずである。子供たちにしてみれば、二袋目の飴が貰えるからである。子供たちにせがまれては、親もかたなしで、十一月の土日、教



会はめずらしく千客万来とあいなった。

先日、故郷の朝倉市に帰省した折、五十年を経た今も、その教会に七五三の飴が納品されていると知って驚いた。今も、続けているのだろう（お母さん、笑い者にしてゴメン）。

日本における神仏習合

外来文化を重層的に受け入れて、内包してゆく。宗教もその例外ではない。私は、そう思考している。おそらく、習合が起こってしまった後に、後追いのかたちで、大日如来＝天照大神説や、本地垂迹説、仏法を守る神々の護法神説などが生まれてゆくのだと思う。つまりこれは、独自の説を作って、宗教対立をなくしてしまう方法なのである。もちろん、このやり方は、宗教の伝統を重要視する立場からみると危険な教説であるけれども、矛盾を解決して宗教を土着化させる方法ということもできよう。

日本仏教は、教団のエリートたちを中国に留学させることによって、自派の権威を確立しようとしていた。だから、留学僧たちは、その時々流行している中国仏教を日本に導入してきたのである。華嚴教、浄土教、密教、禅など時代時代の仏教を日本に導入してきたのだが、本家の中国では、それらの流行は次々にリニューアルされては、消えてゆく。ところが、日本では、それがそのまま保存されてしまうのである。日本には、

密教を奉ずる真言宗もあれば、浄土教を奉ずる浄土宗もあり、禅宗もある。中国では、そんなことはあり得ない。つまり、時代ごとに展開していった中国仏教が、日本ではそのまま併存して残っているのである。こうなった理由は、二つある、と思われる。

一つ目の理由は、日本では新旧の対立がなくなってしまうことが挙げられる。例えば話で説明すると、本家ではWindowsのバージョンアップが次々になされているのに、日本においては歴代のバージョンがそのままあちらこちらに残っているというような状態なのである。同様に、旧バージョンの仏教は本家の中国にはなく、日本で独自に存在しているのだ。いわば、知と宗教のガラパゴス化だ（独自化）。

もう一つの理由は、日本が文明の辺境の地で、かつ周りが海に囲まれていたからである。中心部で起こった大激流も、周縁部である日本には小さな波となって伝わる。中心部では大激流が起こるたびに、古いものが一掃されてゆくのだが、周縁部では、古いものも押し流されず残存していったのである。

この二つの理由によって、中心部の中国では、激しい対立関係にあったものが、日本では新旧並存のかたちで残ってゆく。中心部で対立していたものが、習合して、日本のなかで独自のものになってゆくのである。中国においては深刻な対立を招いた儒教と仏教も、日本ではゆるやかに習合してい

た歴史がある。こういった現象を積極的に評価すれば、「対立を越える習合思想によって平和を保った和の国、日本の習合宗教」といえるだろう。私も、その考え方に賛成したいと思うが、そういった習合が可能だったのは、日本の地理的条件に負うところが大きかったことも、忘れてはならない。

《プロフィール》

上野 誠氏

1960年 福岡生まれ。國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。博士（文学）奈良大学文学部教授。

万葉文化論を標榜し、ユニークな視点とソフトな語り口で「万葉集」を学ぶことの楽しさを多くの人々に伝えている。

『万葉学者、墓をしまい母を送る』（講談社）

七年間母親を介護し、家じまいをした後、家族とその歴史に思いを馳せて執筆。「己が経験した家族の死を、いまの自分の感覚で描いてみたい。己を始発点とする民俗誌、家族小史のようなものを書いてみたい。それこそ、実感できる歴史なのではないか。なにも偉人の伝記をつなぐことだけが歴史でもなかり、との思いがペンを走らせた。（あとがき）」

万葉の時代から現代まで、人は誰かを看取り、そして送ってきた。その長い営みに思いを馳せた深いエッセイ。